



夢の本棚

発行所：松居直コレクション
プロジェクト
代 表：金戸 美紀予
事務局：石川県小松市
小馬出町10-3
空とこども絵本館
☎ 0761-23-0033
bookrin@city.komatsu.lg.jp



【活動方針】①絵本の楽しさを伝える〈親子読書の奨励〉②絵本の歴史を学び、進むべき方向を考える〈絵本文化の研究〉
③市が所有する知的財産として、次世代に正しく伝える〈絵本文化の継承〉

子どものイメージを動かせる

◆子どもの本は、ストーリーが分かれば、意味が分かればいいってもんじゃないありません。子どもの中で、もちろんその意味が分かってストーリーも分かって、それが目に見えるように子どものイメージが働かなければだめなんです◆ただ最近はそのような日本語の使い手がとても少なくなりました。私が知っている範囲では、石井桃子さんと瀬田貞二さんが最高だと思えます。瀬田さんの日本語ってのは、日本の古典に精通している方ですから、本当の日本の伝統的な調べてのを見事に活かした文章です。

日本語の伝統的な調べ

◆『三びきのやぎのがらがらどん』

「子どものとも」で育む豊かな心と生きる力⑥
自分の声で言葉を語りかけていくことが喜びに

『三びきのやぎのがらがらどん』



瀬田貞二訳/池田龍雄画
38号/1959年5月号

代表作ですけど、がらがらどんの最初のところは「むかし三びきのやぎがいました。なまえばどれもがらがらどんといいました。」と「七五調」になっています◆瀬田さんは、子どもに日本語で語る時には、日本語の古代からの伝統的な調べといものが自然に出てくるんです。そうすると、子どもたちはすーっとそれに乗れるんです。日本語がすーっと入ってくるんです。

言葉を食べてしまう

◆『三びきのやぎのがらがらどん』は、万智さんが3歳の時に全部覚えていて、字が読

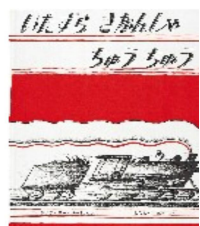


めないのに本を読んでたということのエッセイに書いてらっしゃいました。2歳から3歳まで、お母さんに毎日読んでもらっていたら、いつの間にか全部覚えちゃったんですね◆絵を見てると言葉が出て来ると言えますよ。そして、その言葉の表現の仕方が「一言半句違わないように言う」んです。3歳、4歳、5歳と字が読めるようになりますと、その力は消えて行きますけど◆子どもたちは全員持っている力なんですけど、ほとんど知らないんです。機械語の今の生活の中では、そういう力はほとんど失われて行っているんです◆人間の口から出る言葉で喜びを与えてくれる。ほんとうに生き生きと目に見えるような世界を体験できる。そういう言葉の世界って、子ども

は食べてしまう。私は「食べてしまう」としか言いようがない。全部食べちゃって、それが口から出て来るんですよ◆ですから、子どもたちに「読んでやる」というふうには考えないで、子どもたちに「自分の声で言葉をちゃんと語りかけていく」と同時に、「絵をちゃんと子どもたちに読ませるように本を開けていく」ということをやっておきますと、子どもは「言葉の面白さ」とか「言葉の力」とかを理屈を超えて体験できる◆やがて、しばらく時間はかかりますけど、大きくなって今度は言葉で表現するとか、文字として表現するとか、子どもの持っている言葉の生活に反映されてきます。人前でいろいろ話をしたり、詩を書くようになるとか、長編の物語を書くようになるとか◆言葉というものが特別なものじゃなくて、日常生活でご飯を食べると同じよう

絵の連続性と変化

◆バートンさんの絵本に、村岡花子先生に訳していただいた『いたずらきかんしゃちゅうちゅう』があります。絵と文章のテキストのレイアウトが見事に工夫されてるんですよ。この絵も、とってもよく物語を語る絵です◆バートンさんは絵を描いて、それを全部パネルに貼って部屋の中で眺めて、絵の連続性と変化を確かめられる。物語が切れぬように絵で表現できているかどうか、そこにテキストのレイアウトをされるんです◆こうして私は、海外の物語絵本からたくさん学ぶことができました。(つづく)



ジェームズ・ドハーティ文・絵
村岡花子訳
1961年/福音館書店刊